電脳空間（変態少女ゆかりが性器処刑されるまで）

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
電脳空間（変態少女ゆかりが性器処刑されるまで）

【Ｎコード】
Ｎ７７８３ＩＫ

【作者名】
暗闇魍魎

【あらすじ】
異常な性欲をもつ"ゆかり"は、ネットで知り合った"マコ"と毎日チャットで妄想を膨らませる。常軌を逸した二人の会話が続くなか、"ユカリ"の妄想はいつしか現実のものとなり、異常さが加速していく。
そして、ゆかりはその自分が望んでいた妄想通り残酷に処刑されていった……。

1、ユカリとマコ・異常者の異常な会話

1、ユカリとマコ・異常者の異常な会話

ユカリ＝ねえ、マコ。スクランブルかけていいかな？

ゆかりはパソコンのキーボードから打ち込んだ。

マコ＝どうぞ、どうぞ。また秘密のお話かな？実は私も話したい事があるのだ。

ディスプレイに相手の返事が映し出される。「マコ」広大なネットワーク空間で知り合ったゆかりの何でも話せる親友の一人だった。二人とも年が同じで全寮制の女子校に通っている。どちらの学校も校則が厳しく下着の色・形まで指定されており、休日も申請し許可がおりなければ外出することさえできなかった。お互いそんな学校の悪口を言い合い、それがきっかけで仲良くなっていった。そして、スクランブルをかけてプライベートの話を繰り返すうち、お互いの性癖も同じということに気付くと以来毎日チャットで話し合うような仲になっていた。

ユカリ＝じゃあ、メールでパスを送るね。

ゆかりはキーボードから打ち込むと、予め用意してあったメールをマコのアドレスに送信した。そして他人から覗かれないように、このチャットルームにスクランブルをかける。

マコ＝昨日のお話の続きでしょ？ユカリって私以上に変態だよね・・

しばらくしてログインしてきたマコの言葉がディスプレイに映し出された。

ユカリ＝変態には違いないけど、変態よりもっと蔑んだ「ドブスで無乳の変態性器奴隷」とか言ってほしいなぁ。私は、ただの変態ではないのだ

マコ＝はいはい。続きということはユカリ、昨日話してたエッチな恰好を今日はしてるんだ

ユカリ＝うん、とっても恥ずかしい服装なの。一目で私が「ドブスで無乳の変態性器奴隷」ってわかるよ

マコ＝へぇー、どんな服装か教えてよユカリ

ユカリ＝どんなと言っても、昨日話した通り、そのままの恰好だよ

マコ＝でも聞きたいの。教えてよ

ユカリ＝うん、わかった。まず全裸になって黒いパンストを穿きます

マコ＝ふむふむ。黒のパンストは基本だよね。私のドミネーター様も黒が大好きなの。私が黒のパンスト穿くといつもより酷く痛めつけてくれるんだよ

ユカリ＝はいはい、自慢しないで。次に学販の濃紺のスクール水着を着用。小さめのサイズを着るところと旧タイプの水抜があるタイプを着るのがポイントです。

マコ＝おーっ体のラインを強調する衣服も基本だね、ドエムの異常者なら特に。それに小さいサイズはそれだけで身体が締め付けられて気持ちいいもんね

ユカリ＝うん。その拘束感ともう一つ意味があるんだ。それは表現力です

マコ＝表現力？

ユカリ＝そう。小さいサイズだと性器やお尻に食い込んでくるでしょ。その食い込みが私の性器の存在を強烈にアピールするのだ　だいたい私はドブスで体系も悪いから、性器しかアピールするとこないもんね

マコ＝スクール水着ってユカリの勝負ウェア？

ユカリ＝わかる。私、処刑してもらいたい時はこのスクール水着で拘束されて処刑されたい

マコ＝そういえばユカリって幼児体型なんだっけ？

ユカリ＝うん、そうだよ。胸もお尻もないし、ウェストも括れてないしね。陰毛もまだ生えてないよ

マコ＝ユカリの体型だとレオタードやスクール水着が似合うよねぇ

ユカリ＝羨ましい？あれっでもマコも幼児体型だって言ってたじゃない

マコ＝うん。でも私は顔も童顔だし、体も小柄というより小さいからほんとに子供に見られちゃうんだよね

ユカリ＝ロリコンの御主人様には喜んでもらえるじゃない

マコ＝でもユカリみたいな幼児体型で清楚なお嬢様の泣き声や悲鳴の方が喜んでもらえるんじゃないかなぁ

ユカリ＝私も早く泣き叫びたい・・・

マコ＝ごめん、ごめん。話を戻します

ユカリ＝そうそう。そして、さらに太ももまでの黒いサイハイソックスを重ね穿きします。もちろん、これも太ももに食い込む程良いよね

マコ＝あっ、いいよねぇ重ね穿き。拘束されている感じで・・

ユカリ＝そしてスクール水着の上から白いパンティを穿きます

マコ＝そうか、さすがユカリ。スクール水着の上に穿くのって異常な感じがして、私は頭がおかしいですと言ってるみたいで良いよね。その下着って当然ユカリに合わせてロリパンでしょ？

ユカリ＝勿論。子供用の飾り気のない綿の純白の下着です

マコ＝うーむ。ユカリってこういう変態で異常なコーディネイトするの得意だよね

ユカリ＝ありがとう。それは私は変態で異常だから。でももう一つ

ポイントがあるの

マコ＝なんだろ？水着の上に白いブラも着けるとか？

ユカリ＝さすが、マコ。女の子の女の子らしい所を強調するのがいいんだ。痛めつけてもらう部分を白い下着で目立つようにするといいと思うの・・

マコ＝そうだよねぇ

ユカリ＝そしてその後「汚れた下着を口に押し込む」の

マコ＝そうか。口を塞がれると惨めさが強調されるもんね。しかも汚れてるのって良いよね

ユカリ＝本当はこれで頭にも汚れた下着を被って完成なんだけど、そうすると画面が見えなくなっちゃうから・・

マコ＝なるほど。目も塞がれちゃうと「モノ」みたいに扱われるようで嬉しいよねぇ

ユカリ＝ねーっ

マコ＝ユカリはその恰好でどんな拷問受けたいの？

ユカリ＝鞭。ぜったい鞭

マコ＝そうだよね。ユカリ鞭大好きだもんね

ユカリ＝うん。最初は絶対鞭で打って頂きたいの

マコ＝ユカリ、どんな風に鞭打たれたいの？

ユカリ＝ようしっ、じゃあ小説風でいくよ

ゆかりはキーボードに向かうとテンポよくキーを叩き始めた。

2、小説・性器鞭打ち

2、小説・性器鞭打ち

ゆかりは薄暗い部屋で黒いレオタード、黒いパンスト、さらに黒のストッキングと白いパンティも穿かされ、その惨めな姿を晒されていた。口にはつい先程まで穿いていたパンティを押し込められ喋ることも出来ず、そして、とうとう頭にも体育の時に穿く黒いブルマーが被せられ見ることも出来なくなった。

・・怖い・・

ゆかりはこれから自分の身に何が起こるのか想像できずただ震えていた。と頭上から機械的な声が聞こえてきた。

「両手を上に挙げなさい。」

ゆかりが命令されるまま手を挙げると次の指示がまた頭上から聞こえた。

「次に足を大きく開きなさい。」

ゆかりはおずおずと足を開いていった。薄暗い部屋でゆかりの白いパンティの股間がどんどん露になっていく。ゆかりはこれ以上開けないというほど足を大きく開いた。とそのゆかりの足首が皮ベルトに鎖のついた固定具で開いたまましっかり固定される。

・・な、なに・・

ゆかりは恐怖で足を閉じようとしたがもはやそれは叶わなかった。
そしてゆかりの両手も天井からのロープでしっかり固定されてしまった。

・・いやっ、怖い・・

四肢を固定されたゆかりは今まで以上に恐怖で震えだした。

「鞭打ちを開始します。」

無機質な声が拷問の開始を告げた。

・・鞭、私どこを打たれるの?・・

ゆかりはしかしすぐ理解した。

・・私の性器。私、性器を鞭で打たれるんだ・・

ゆかりが下腹部に力を入れた瞬間、想像通り大きく開いたゆかりの股間の中心に鞭が叩き込まれた。

「おぉぉぉーーーーっ」

自分の性器を襲った激しい痛みにゆかりは塞がれた口から悲鳴を上げた。頭に被せられたブルマーの下、ゆかりの顔はたちまち涙と鼻水で汚れていく。

「あぁーーーーっ痛いぃぃーーーーっ」

ゆかりの性器に再び鞭が叩き込まれ、ゆかりは絶叫した。

・・ああっ痛い、痛いよぉ・・

泣き叫ぶゆかりの性器に鞭はどんどん激しさを増して叩き込まれていく。ゆかりの純白のパンティの股間部分が赤く変色してきた。柔らかなゆかりの性器が容赦なく打ち込まれる激しい鞭の一撃で皮膚が裂け血が滲みだしていた。

・・私、性器を鞭で打たれてる・・

足を開かされ性器を鞭で打たれている自分の無様な姿を想像してゆかりは、性器が痛みとは別に熱くなってきているのを感じた。

ゆかりは泣き叫びながらも自分の性器を鞭で打ちやすいよう腰を前に突き出した。ゆかりのその姿にさらに激しく鞭が性器に打ち込まれる。

・・あぁ痛いーっ、痛いですー・・

ゆかりは性器を鞭打たれ泣き叫びながら、無意識に鞭の間隔に合わせ腰を突き出し、その股間を晒していた。

・・壊して、壊してぇーーっ・・

激しい鞭打ちの連続にとうとうゆかりの股間から大量に血が滴り落ち、鞭が叩き込まれる度、血飛沫が辺りに舞った。白いパンティの股間は真赤に染まり、床には血溜まりが出来ている。

・・もっと痛めつけてください、もっと苦しめてください、そして私の性器を壊してぇーーっ・・

その、ゆかりの思いが通じたのか、ゆかりの性器に激しく叩き込まれていた鞭が一旦休止され頭に被せられていたブルマーが乱暴に取られた。それは、鞭の種類が変えられた事をゆかりに認識させる為だった。。今までも革製の一本鞭でかなり凶悪なものだったが、次に用意された鞭は棘鞭。処刑用の鞭である。人を殺すための道具だ。ゆかりは、さすがにその鞭を見た瞬間青ざめ震えだした。

・・なにあれ、怖いっ・・

ゆかりは、目の前でゆかりに見せるように振られてる凶悪な処刑鞭が自分の性器に叩き込まれる姿を想像し、嫌々というように首を振り、股間からは湯気を立てて小便があふれ出した。

マコ＝どしたの？ユカリ。
ユカリ＝マコ、私・・・
マコ＝あっ恥ずかしい液出てきたんでしょ？いいよ、このまま待ってるから。
ユカリ＝ごめんね、早く済ますから・・
マコ＝いいの、ゆっくりで・・私も出てきちゃったから・・
ユカリ＝ふふっ、了解。

ゆかりは顔を上気させて椅子から立ち上がった。

3、異常者の自慰

3、異常者の自慰

ゆかりはいつもの場所に木刀を立て掛け、仰向けに寝転んだ。そして、足を開き腰を持ち上げ股間に手を当てると激しく擦り始める。

「おっおっおっおっ」

下着を押し込んだゆかりの口から声が漏れる。股間を擦る手の動きがどんどん早くなっていく。

・・壊して、壊して・・

ゆかりは爪先立ちになり一層高く腰を持ち上げると股間から手を離し、脇に置いた皮のベルトを掴んだ。

・・覚悟するのよ、ゆかり・・

ゆかりは手にしたベルトを自分の性器に思い切り叩き込んだ。バシッという乾いた音が響く。

・・もっと痛くして、もっともっと・・

狂ったようにベルトを自分の性器に叩きつけながらゆかりは絶頂に達しつつあった。

・・壊してくださいーっ・・

ゆかりはベルトを投げ捨て足で木刀を蹴った。そして両手を腰の下に当て高く持ち上げると今まで以上に大きく足を開いた。その開いたゆかりの股間めがけて重い木刀がゆっくりと倒れてくる。

・・あっあっ壊れます・・

ゆかりは虚ろな目で倒れてくる木刀を見つめている。大きく開いたゆかりの股間、白い下着には染みができていた。その染みに木刀が激しく激突する。

「おぉぉーーーっ」

性器を木刀に直撃され一瞬身体を硬直させたゆかりは糸が切れたように崩れ落ちた。

ユカリ＝マコ、いる？

マコ＝いるよー。オナニー済んだの？

ユカリ＝うん。マコは？

マコ＝私も済んだよ。いやーユカリの小説には興奮しました

ユカリ＝私も書いてるうちに性器が濡れてきちゃって困った

マコ＝ユカリって、ああいう風に壊してもらいたいの？

ユカリ＝うん。とにかく性器を鞭で打たれ続けるの。私が恐怖と激痛で発狂して死ぬまで何日でも何カ月でも鞭で打たれ続けるの

マコ＝ユカリって長い間いたぶられるのが好きなのかな

ユカリ＝うーん、どうかなぁ。でも私、性器を痛めつけられるのは大好きだと思う

マコ＝それは私もそうだよ

ユカリ＝でもマコはお尻の穴や胸や乳首を痛めつけられるのも好きでしょう

マコ＝うん

ユカリ＝私は性器以外は恥丘と太股くらいかなぁ、痛めつけてもらいたいの

マコ＝一点集中タイプなんだね、ユカリは・・

ユカリ＝あっそれ。私、性器を徹底的に痛めつけられるのがいいなぁ

マコ＝ユカリらしいよ

ユカリ＝そうかなぁ。そういえばマコも話があるって言ってなかった？

マコ＝あっそうそう。私、昨日拷問受けたんだ。その報告でーす

ユカリ＝あーっ、早く教えて教えて

マコ＝慌てない、慌てない。私もユカリに倣って小説風にしてみました。それでは送信しまーす

ユカリ＝あっ、メールにしたの

マコ＝だって私にはユカリみたいにオンラインで書けるほど才能ないもの。昨日、拷問受けた後、泣きながら書いたの。まあ今だって痛くて泣いてるんだけど・・

ユカリ＝えーっ何っ。教えてよぉマコ

マコ＝じゃあヒント。私ねぇ今日処刑してもらうの。今日が最後の拷問なんだ。だから、昨日も酷いことしてもらったんだよ。後は折角の私の力作なんだからメールを読んでください。そろそろ届くでしょ

4、小説・処刑執行

4、小説・処刑執行

ユカリ＝えーっそうなの、私も処刑してもらいたいよぅ。一緒に処刑してもらえないのぉ、マコ

マコ＝あっそれはいくらユカリの頼みでも無理。でも私の後にユカリのこと推薦しておこうか？

ユカリ＝ほんとー、お願い

マコ＝わかった

ユカリ＝絶対、絶対だよ。私、もう我慢できないから・・

マコ＝はいはい。でも気に入って戴けるかはユカリ次第だよ

ユカリ＝うん、頑張る

マコ＝気に入って戴ければその日の内に処刑してもらえるかもしれないよ

ユカリ＝うわあ、興奮してきたぞ

マコ＝ユカリ、現金なんだから・・

ユカリ＝ふふっ。あっメール届いたよ

真子は鏡の前で自分の身体を見つめた。小さな胸で乳首が固く勃起している。そして陰毛の生えていない恥丘の下に僅かに真子の性器の裂け目が見えていた。

・・私、今日処刑してもらえるかな・・

真子は自分の裂け目に手を伸ばし拡げてみる。

・・痛いっ・・

度重なる拷問で真子の性器は触れただけで激痛がはしる。しかし真子の陰核は乳首同様固く勃起していた。

・・早く処刑してもらえるといいね・・

真子は自分の性器に語り掛けると、まず黒いパンティストッキングを穿き、その上に白いパンティを穿いた。意図的に小さいサイズのパンティを選んだため真子の性器の裂け目や臀部の割れ目に食い込むようにピッタリとフィットし、黒い太股と白い股間のコントラストが淫靡な匂いを強烈に発している。真子は満足げに自分の下半身を眺め、白いスポーツブラを身に付けた。小さいが形のいい真子の胸が一層形良く見え勃起した乳首がツンと天を向いていた。真子は鏡に映る自分の姿に上気した。

・・すごいエッチ・・

今までセーラー服をはじめ様々な服を着用し拷問を受けてきた真子であったが、そのどれよりも淫らで惨めな匂いを発散していた。

・・パンストの上にパンティを穿くだけでこんなに惨めになれるの・・

真子はアドバイスをくれた同い年の友人に感謝した。そして両手を後ろに回し、足を開いてみる。

・・私、凄く惨めでいやらしいの・・

息を荒くし鏡を見つめる真子の瞳は潤み、膣口からは愛液が染みだしていた。

準備室を出た真子は拷問室の重い扉を開け中に入ると部屋の中央に進み両手を後ろに回した。真子の両腕はそのまま身体の後ろできつく縛り上げられる。そして首に黒い首輪が取り付けられ天井からのロープがそれに付けられた。その後、まず真子は全身を鞭打たれ、泣き叫ぶ姿を楽しんでもらうのがこれまでの慣例だった。真子は目をつむり軽く足を開き、自分の身体が鞭打たれるのを待った。

「目を開けなさい」

いつもと違う命令が真子に与えられる。

・・えっ・・

真子が目を開けると前方の卓上に夥しい数の針が用意されているのが目に入った。

「あなたの処刑は今日、明日。二日かけて行われます」

「はい・・」

真子は身体を震わせ静かに泣き出した。それは、歓喜の涙なのか、恐怖の涙なのか、真子本人にも分からなかった。

5、小説・処刑執行2

5、小説・処刑執行２

さっそく真子の固く勃起した右乳首がブラの上から摘まれ上部に針が当てられると、そのまま真子の乳首に突き刺されていった。

「痛いっ」

小さく叫んだ真子の呼吸は早くなり始めていた。続いて二本目の針が真子の乳首を今度は横から貫通する。そして、三本、四本目が斜めに乳首を貫通した後、五本目の針は正面、乳首の先端から突き刺されていった。

「あーーーーーーっ」

絶叫した真子の胸へ容赦なく針はどんどん押し込まれていく。白いブラのポッチリと可愛く膨らんでいる真子の乳首は無惨にも五本の針が突き立てられ赤く染まり始めた。と今度は真子の形のいい胸に無造作に針が刺されていく。

「あーっ痛いーっ」

真子は涙と鼻水で顔面をぐしょぐしょに汚しながらも、針を刺しやすいように胸を突き出していた。その必死に突き出す真子の胸がまるで「物」であるかのように無情に針が突き刺されていく。

「うわあぁぁあぁぁ・・」

大声で泣く真子の胸はブラを着けている事が判らないほど大量の針を突き刺されていた。

「足を大きく開きなさい」

真子は泣きながら命令に従い足を開いた。黒いパンストに包まれた太股の間で白いパンティの股間が鮮やかに目を惹きつける。

・・怖い、怖いよ・・

真子は当然次に針山にされるのは自分の性器だと認識していた。足を開くよう命令された時点でそれは決定されたことだった。真子がどんなに泣こうが喚こうが、そして暴れたとしても、あと数十分後には性器を針山にされ泣き喚く自分がいるのは間違いのない事だった。その真子の股間が白いパンティの上から擦られはじめる。すでに固くなっていた真子の陰核がさらに固く勃起しパンティ越しにもポッチリとその存在を露にした。

「ひっ」

真子は針の狙いが自分の陰核だと気付き小さく悲鳴を上げる。

・・私、女の子の一番敏感なところ刺されちゃうの・・

真子は涙を流しながらも精一杯足を開き針を刺しやすいように腰を突き出した。

「あっ・・」

真子の想像通りパンティの上からポッチリと膨らんだ陰核が摘まれ針が当てられた。

「こ、怖いです・・」

真子の身体はぶるぶると震え始めていた。正確に陰核を串刺しにするため、真子の陰核がさらに強く摘まれ、ゆっくりと針が突き刺されていく。

「ひっひぃぃーーーーーーっ」

チクッとした鋭い痛みに続き、自分の性器を襲った想像を絶する痛みに真子は発狂したように悲鳴を上げた。その真子の無様な姿を楽しむため二本目の針も摘まれた陰核に突き刺されていく。

「あっあっあっ痛いーーっ」

泣き叫ぶ真子の大きく開いた股間中央からパンティを盛り上げ湯気を立てて小便が溢れだした。と真子が失禁するのを待っていたかのように直径一センチ程の太い針が、小便を溢れさせる真子の尿道に当てられた。

「私のおしっこの穴、もう少し前です・・」

真子が次の標的は自分の尿道だと気付き涙声で告げると針の位置が修正される。

「はい、そこが今お漏らししている私のおしっこの穴です・・」

真子が告げると針に力が込められ、真子の尿道に切っ先が挿入されてきた。

「ひぃぃぃーーっ」

尿道に押し込まれていく太い針は、容赦なく真子の細い尿道を切り裂いていく。小便と共に流れる血で真子の股間は赤く染まってきた。

「痛いぃぃもうだめぇーーっ」

ゆっくりと残酷に尿道を裂きながら身体の奥深く突き刺されていく針の激痛にとうとう真子は泣きながら腰を引いてしまった。そして、腰を振って抵抗する。

6、小説・処刑執行3

6、小説・処刑執行３

「もう、おしっこの穴は許してくださいぃーっ」

無様に哀願する真子の髪の毛が掴まれ顔を上げられると涙と鼻水で汚れた真子の顔面が思い切り殴りつけられた。

「ひぃっ」

小さな悲鳴を上げた真子の顔面が続けて殴りつけられる。

「許してください。私、もう動きませんっ」

鼻と口から血を流し真子は涙声で訴えた。そして震えながら足を大きく開き、股間を突き出す。その震える真子の尿道に再び針がゆっくり押し込まれていく。そして、とうとう根本まで針は押し込められていた。

「あぁあぁぁぁあぁん」

尿道を裂かれ子供のように大声で泣き続ける真子の性器に再び新しい針が次々と容赦なく突き刺されていく。

「あっあっあっあぁーーーーっ」

真子の白いパンティの股間が無数の針で埋め尽くされる。

「痛いぃぃあぁあぁぁーーっ」

真子は夥しい涙を流し震えながら性器に針を刺され続けていた。そしてとうとう真子の恥骨下部から肛門手前まで股間一帯に夥しい数の針が突き立てられた。それは女の子の大切な場所、胸と性器を徹底的に壊すという真子の望みでもあった。

後ろ手に縛られ足を大きく開き、胸と性器を文字どおり針山にされた真子に次の命令が告げられた。

「本日の処刑はこれまでです。その三角木馬に跨り明日の処刑まで待機しなさい。」

真子は恐怖で目を見開いた。しかしこれも性器が針山にされたようにすでに決定された事だった。

「はい・・」

真子は震える声で返事をし、三角木馬に向かって歩き出す。

・・私、処刑して頂く前に壊れるかも・・

真子はこれから自分が跨る三角木馬の鋭角を怯えた目で見つめた。そして木馬の横の段を昇り、木馬を跨いだ。これで真子が木馬の鋭角に腰を下ろし、今足の下にある昇り段を蹴って外せば真子は明日の処刑実行まで苦痛に包まれた時間を送ることができるのだ。

・・誰か見てください。私の無様で惨めで哀れな恰好・・

真子は木馬の前にある鏡に映る自分の姿を見つめた。涙と涎と血で汚れた顔、針山にされた胸、そして大切な性器に刺された無数の針。真子は鏡を見つめながらゆっくりと腰を降ろしていった。

「痛いっ」

性器に突き刺された針の先端が三角木馬の鋭角に触れた瞬間、真子は激痛で小さく叫んだ。

・・痛い、痛いです私の性器・・

真子が泣きながら腰を降ろすにつれ、ずぶずぶと性器に深く針が押し込まれていく。

「いやぁぁーーーっ」

あまりの苦痛に真子は、一気に三角木馬に跨り踏み台を蹴飛ばした。鋭角が真子の性器に食い込み、性器に刺された針は真子の身体の奥深く突き刺さる。

「ひっひぃぃぃーーーーーーっ」

自分の性器を痛めつける残酷な拷問に真子は悲鳴を上げ続けた。その真子の両足に五キロの錘が取り付けられる。

「あぁあぁぁーーーっ」

真子は涙で滲む目で鏡を見た。無数の針が突き刺さり木馬が食い込む自分の性器から血が流れ出している。

「処刑までの間、必要な物があれば言いなさい。」

真子は苦痛に耐え答えた。

「私のパソコンをセットしてください・・」

真子は、最後の最後までゆかりと会話を楽しみたかった。

7、最後のチャット

7、最後のチャット

・・凄い、凄いよ・・

ゆかりは真子からのメールを読みながらたまらず自分の性器を愛撫していた。真子が受けた凄まじい拷問に興奮しきっているゆかりは、引き出しから画鋲を取り出し、その針先を見つめ自分の唾をつける。

・・私、性器に針を刺すなんて想像したことなかった・・

ゆかりは裁縫道具の詰まった箱からも針を取り机の上に並べた。そして、キーボードをタイプする。

ユカリ＝マコ、いる？

マコ＝うん。メール読み終わった？

ユカリ＝うん、読んだよ。あのねぇ、今マコって・・

マコ＝そうだよ。今、私、三角木馬に跨って処刑してもらうのを待っているの

ユカリ＝性器、痛い？

マコ＝うん、痛いよぅユカリ。私の性器、血が止まらないの。もう、性器が二つに裂けそうで痛くて苦しくてずっと泣いてるの。そのうえ、このボイスコントローラー泣き声だからなかなか認識してくれないんだよ

ユカリ＝そうか、両手、縛られているんだもんね

マコ＝ユカリ、ありがとね

ユカリ＝えっ？

マコ＝昨日のチャットでエッチな服の話したでしょう。そのヒントのおかげで私、処刑してもらえるんだ

ユカリ＝それはマコの自分を痛めつけて楽しんで下さいという気持ちが伝わったからだよ

マコ＝私、そういう気持ちあったのかな？

ユカリ＝もちろん。メール読んでても分かったよ。私も本当はね、痛めつけて貰いたいという気持ちよりも、痛めつけて楽しんで貰いたいという気持ちの方が強いの

マコ＝えーっユカリが・・

ユカリ＝あーっひどい。私、我侭な女の子じゃないよー。私を痛めつけて楽しんでくれるのが一番嬉しいんだから・・

マコ＝ユカリって自分を処刑してくれる事だけが望みだと思ってた

ユカリ＝もちろん処刑してくれなきゃ嫌。でも楽しんで壊してほしいの

マコ＝なんか難しいなぁ・・

ユカリ＝例えば私の今の服装。スクール水着に黒いパンストでその上に白いパンティでしょ。全身黒っぽい中でパンティだけ白。そんな私が両手を上げて足を開きました。さてどこに視線がいくでしょう？

マコ＝股間？

ユカリ＝うん。そして私の股間を鞭で打つと、女の子の性器を鞭で打っているって意識が強調されて楽しいよね

マコ＝女の子を意識させる気持ちが大事なのかな？

ユカリ＝私はそう思うよ。抵抗できない女の子を徹底的に痛めつけて泣き叫ぶ姿を見るのが楽しいの。私みたいに命令に逆らえない女の子を痛めつけたり、拘束具や縄で縛られて自分の意志で動けない女の子を痛めつけたりね。女の子が無様で惨めな姿になるほど楽しいと思うよ。そしてね、女の子が女の子を意識させるのは性器が一番だと思うの

マコ＝女の子にとって性器は大切な場所だし、見られるだけで恥ずかしいもんね。だから女の子が性器を痛めつけて貰う時は怖くて痛くて惨めな気持ちになるんだね

ユカリ＝ねーっ。女の子の性器は敏感で皮膚も薄いし拷問受けるのに最適だよね。そんな性器を拷問されれば女の子は我慢出来なくて

泣き叫ぶしかないもんね。そして、その姿を見れば女の子を痛めつけてるって意識が強烈にするでしょ。例えばお尻を鞭で打つよりも股間を鞭で打った方が女の子を痛めつけてるっていう意識が強いよね

マコ＝うん、わかる

ユカリ＝女の子を痛めつけるのは性器を拷問するのが一番楽しいと思うよ。私も性器を痛めつけてもらうのが一番痛くて辛いもん

マコ＝うんうん。だからユカリ、性器拷問が好きなんだね

ユカリ＝うん。私も女の子だから大切な性器を痛めつけて楽しんで貰いたいの。マコも女の子だから、マコの性器に針を刺してる時、楽しかったと思うよ

マコ＝かわいい女の子の性器に針を刺して苦しめてるっていう意識

8、異常者ゆかり

8、異常者ゆかり

ユカリ＝ふふっ。それでマコお漏らししたでしょ

マコ＝そうか。お漏らしって女の子っぽいもんね

ユカリ＝性器に針を刺された痛みで無様におしっこを漏らす女の子。この女の子のおしっこの穴を引き裂けばもっと泣き叫ぶだろう、という感じかな

マコ＝じゃあ楽しんでもらえたよ。私、おしっこの穴に針を刺されて泣き叫んでたもの。針が私の中に入ってくるでしょ。そうするとおしっこの穴がびりびり裂けていくのが分かるの。もう私、二度と普通におしっこできないんだと思うと怖くて痛くて気が狂いそうだったよ

ユカリ＝昨日のマコってすごく女の子していたんだと思うよ。だから、あれだけ酷い拷問をしてもらえたんだよ

マコ＝うん。私、女の子でよかった。女の子だからあんなに酷い拷問で痛めつけてもらえたんだもん

ユカリ＝ねえ、マコ。私も今、性器に針刺していいかな？

マコ＝だめ。絶対だめだよ

ユカリ＝どうして？もう私我慢するの辛いの

マコ＝自虐も気持ちいいけど、本当に処刑された方がもっともっと気持ちいいよ。だって、どんなに痛くても許してもらえないしね

ユカリ＝でも、刺してみたい・・

マコ＝それに性器に針を刺してもらう時、初めてのほうが怖さと痛みで興奮するよ

ユカリ＝そうだよね・・

マコ＝大丈夫だよ。ユカリだったら明日処刑してもらえるよ

ユカリ＝うん。ありがとう

マコ＝あっ私の処刑始まるみたい。じゃあ私、惨めに泣き叫んで思い切り苦しみながら処刑してもらうから・・。さよなら、ユカリ

ユカリ＝最後なんだから思う存分泣き叫んで苦しんでね。ばいばい、マコ

翌日、深夜一時。ゆかりは寮の部屋を抜け出し、メールで指示された場所に向かっていた。

・・ここ・・

ゆかりの前に大きな門が現れた。恐る恐るゆかりが触れると門は静かに開き、ゆかりが中に入ると静かに閉まった。

・・どうか気に入って戴けますように・・

ゆかりは指示通り着ていた服を全て脱ぎ全裸で歩き出した。そして、自分の裸体がよく見えるように胸を張り姿勢を正して歩く。夜の冷たい外気がゆかりの裸体を包み込む。不思議と恥ずかしいという気持ちがゆかりには湧いてこなかった。むしろ裸で外を歩き回る自分に興奮していた。

・・私の裸、どうぞ御覧ください・・

しばらく歩くと前方の建物に扉が見えた。扉を開けて中に入ると照明が一斉に点き、ゆかりは思わず胸と股間を手で隠してしまった。

・・いけないっ・・

慌ててゆかりは手を上げ胸を突きだし足を開いた。ここでゆかりは自分をアピールし、気に入られれば次の部屋に進むことができる。

・・私が無様で惨めな姿を晒すほど楽しんでもらえる・・

ゆかりは軽く腰を落とし両手を膝に添えた。そして下腹部に力を入れる。

・・私が立ったままうんちする惨めな姿を楽しんで下さい・・

息み続けるゆかりの身体が汗ばんでくる。

「あっ」

ゆかりが小さな声を上げると同時に肛門から大便が出てきた。

「うんっうんっ」

固い大便がゆかりの肛門から続けて溢れ、ぼとぼとと床に落ちていく。そしてゆかりの排便が終わる頃には大量の大便の山が出来ていた。

その大便の山をしばらく見つめたゆかりは床に座るとM字開脚し、大便を手に取り顔と胸に塗り始めた。

・・私、うんちまみれになります・・

ゆかりは性器を拡げるとそこにも自分の大便を擦り付けた。そして、大量の大便を口と膣、尿道に念入りに押し込む。

・・ご覧下さい。私、上と下のお口でうんち食べてる・・

口と性器に大便を押し込みながらゆかりは自分の惨めな姿に涙を流していた。

・・女の子がこんな惨めな姿になっているの・・

泣きながらゆかりは仰向けになり腰を持ち上げ足を開いた。そして、下腹部に力を入れる。

「あっあっ・・」

尿道、膣口、肛門。ゆかりは股間の三つの穴から大便を溢れさせながら自慰していた。

・・私、三つの穴からうんちしてる。こんな私、もう壊してくださいーっ・・

ゆかりの手の動きが激しくなり、大便が飛び散る。爪先立ちになり腰を高く持ち上げたゆかりはこれ以上ないほど大きく足を開き、自分の陰核を抓った。

「あーーーーっ」

ゆかりは、大便まみれで絶頂に達していた。そして、次のフロアへの扉が開かれた。

9、異常者ゆかり2

9、異常者ゆかり2

・・よかった・・

ゆかりは安堵し開かれた扉から中に入った。そこで、ゆかりは高圧洗浄機で糞尿まみれの体を洗浄された。そして、ここで自分をアピールするための服を着用し待機するように命令される。

・・

ゆかりはまず黒のパンストを穿き、部屋の隅にあった姿見に自分の姿を映してみた。緊張と興奮でゆかりの小さな胸で二つの乳首は固く勃起している。それを確認したゆかりはスクール水着を選択し着用してから再び姿見に向かう。

・・ずっと固くなっているのよ・・

ゆかりはスクール水着越しにもはっきり勃起しているのがわかる二つの乳首を摘んだ。この二つの突起が喜んでいただけることをゆかりは本能で気付いていた。ゆかり自身は性器を痛めつけてもらうことが一番の望みだったが、気に入っていただくためには自分の体の何処を責められてもいいように準備しておくつもりだった。

・・これならお尻も喜んでもらえるかな・・

ゆかりのスクール水着がピタリと貼り付く臀部は割れ目まではっき

りわかり、そして股間部もスクール水着が激しく食い込み性器の裂け目を再現していた。ゆかりは姿見で自分の身体をチェックすると黒いサイハイソックスを穿きはじめた。そして最後に無地で純白のパンティを穿く。

・・私のお気に入りの服装・・

ゆかりは姿見に自分の姿を映した。薄暗い部屋で白いパンティが淫靡に浮かび上がる。

・・私、この姿で処刑される・・

ゆかりは性器が濡れはじめたのを感じた。

・・だめ、もう自分ではだめなの・・

ゆかりはこの部屋に入った瞬間から自分の身体は自分の意志で動かしてはいけないと思っていた。

・・もうオナニーも命令された時以外できないの。我慢しなさい、ゆかり・・

ゆかりは必死に自慰の誘惑に耐えていた。

「部屋の中央、スポットの中に行き、あなたの希望を述べなさい。」

突然命令が告げられゆかりは一瞬身体を強張らせたが、命令通り部屋の中央に進みスポットライトの中背筋を伸ばして立った。

「私・・・」

ゆかりは興奮のためうまく言葉が出てこなかった。

「私の大切な性器、お好きなだけ痛めつけて処刑して下さいっ」

叫ぶように答えるとゆかりは自分の女の子を精一杯強調するため両手を頭上に上げ腰を突き出し足を開いた。白いパンティに包まれたゆかりのなだらかな恥丘に続く股間。大きく開かれ性器に食い込む白い生地が匂い立つほど淫靡に映る。

「あっ」

そのゆかりの太股が手で押し拡げられ、パンティの上から股間が舐められ始めた。

「放尿しなさい。」

両手を上げ足を開いたまま股間を舐められるゆかりに命令が告げられた。

「はい」

ゆかりが下腹部に力を入れると、尿道付近に口が当てられた。

「あっでますっ」

ゆかりは股間に口を付けられたまま放尿する自分に興奮していた。

・・私、おしっこ飲んで頂いてる。私の汚いおしっこ。嬉しい、嬉しいです・・

ゆかりは以前チャットで真子が言っていたことを思い出した。

・・女の子のおしっこを飲んで頂けるのは、その女の子が気に入った証拠なんだよ・・

１０、処刑執行

１０、処刑執行

ゆかりは、両手を上げ足を大きく開き腰を突き出し部屋の中央で立っていた。

・・私、本当に性器を鞭で打って戴ける・・

毎日想像していた性器を鞭打たれるための姿勢、それを今まさに自分がしている。ゆかりの興奮は頂点に達しつつあった。

・・性器を鞭で打ってもらうために自分で足を開いて腰を突き出しているのよ、私・・

ゆかりは自ら大きく拡げ無防備に晒した白いパンティの股間を想像していた。

・・女の子の一番大切なところ、鞭で打って頂くの・・

ゆかりはあまりの興奮で両手を上げ足を開いたこの姿勢のまま、性器に触れもせず絶頂寸前になっていた。

「お願いしますぅ私の性器、鞭で思い切り痛めつけてくださいぃっ」

息を荒くしゆかりが身体を弓なりに反らせた瞬間、唸りを上げてゆかりの白いパンティの中心に鞭が叩き込まれた。

「うわあぁぁぁーーーーーっ」

性器を鞭打たれ絶叫したゆかりの股間から透明な液が湯気を立てて溢れ出す。性器を鞭打たれた瞬間、あまりの激痛にゆかりは失禁していた。しかし、ゆかりは白いパンティから小便を溢れさせながらも一層大きく足を開き腰を突き出していた。

・・痛いよぅ、でも気持ちいいの・・

今まで自虐してきた痛みなどとは次元の違う苦痛にゆかりは狂喜し興奮していた。

・・おしっこ漏らしてるのよゆかり、無様な恰好・・

その小便を漏らすゆかりの股間に容赦ない鞭の強烈な一撃が再び加えられる。

「あっ」

凄まじい痛みに悲鳴すら上げられずゆかりは、鞭打たれたまま身体を硬直させた。

「うわあぁぁぁぁぁぁ」

そして小便を漏らしながらゆかりは大声で泣き出す。鞭はパンティから小便が溢れるゆかりの大きく開かれた股間に正確に叩き込まれていた。

「ひぃぃーーーっ」

性器に鞭が叩き込まれる衝撃でゆかりの下半身がぶるぶる震え、小便の飛沫が辺りに飛び散る。

すでに何時間たったのかゆかりにはまったく分からなかった。途中、長時間に渉る性器への鞭打ちで自分で立っている事のできなくなったゆかりの身体は天井と床からの固定具でしっかりと固定され、最早逃げることもできないゆかりの性器に鞭が容赦なく叩き込まれていた。性器を鞭打たれ続けゆかりの白いパンティの股間部分は真赤に染まり、皮膚が破れ腫れ上がったゆかりの性器は少し動くだけで衣服が擦れ激痛がはしった。しかしそれでも鞭は容赦なくゆかりの性器に叩き込まれた。

「痛いよぅ痛いよぅ」

泣き続けるゆかりの股間からとうとう血が滴り始め、鞭が叩き込まれる度に血が飛び散った。

・・痛いよぅ私の性器、でも、もっと痛めつけてください、もっと苦しめてください・・

出血が酷くなった性器に容赦なく叩き込まれる鞭の痛みにもゆかりは腰を突き出し続けていた。

・・もっと酷いことしてください・・

ゆかりの願いが届いたのか、延々と性器を打ち続けていた鞭の嵐が止んだ。そしてパンティとスクール水着の股間が切り裂かれ、パンストの股間部分が破られた。

「あっ恥ずかしいですぅ・・」

性器を露に晒され思わずゆかりは腰を引いていた。性器を見られる事などゆかりには何でもない事であり、むしろ興奮する事であったが、鞭で打たれ出血し腫れ上がった状態の性器が愛液を溢れさせている事が恥ずかしかった。しかしそんなゆかりの気持ちなど素より関係なく、ゆかりの性器は乱暴に拡げられ固く勃起している陰核が確認される。そしてゆかりの背後に拘束具が用意され、腰と太股の三点が身動きできぬようきつく固定され、両腕も後ろ手にきつく縛りなおされた。

・・なにっ？・・

ゆかりは腰を前後に動かすことさえできなくなっていた。大きく拡げられ動かすことも出来ず無防備に晒される自分の性器。

・・私が我慢出来なくて腰を動かしてしまう程の苦痛を与えて頂けるの・・

ゆかりは鞭以上の残虐な拷問が自分の性器に加えられると想像し息が荒くなってきた。

・・私、性器を徹底的に痛めつけ壊されるために生きてきたの・・

ゆかりは大声で泣き出した。そのゆかりの陰核の先端に直径2ミリ長さ三十センチ程の細い針が当てられる。陰核に感じたチクッとした痛みでゆかりが身構えるより早く、針は陰核からゆかりの身体の中へ何の躊躇も無くずぶずぶと刺し込まれていった。

「あぁぁーーーーーーーーーっ」

ゆかりの絶叫が辺りに響き渡る。

・・痛いぃぃぃっ、私、性器に針刺されているの？こんなに痛いの、もう助けてええーーっ・・

真子は性器を針山にされたと言っていた、ゆかりはその言葉を思い出し、これはまだまだ序の口だと考え恐怖と同時に激しく興奮し、針が刺されている性器を濡らし始めていた。

11、ゆかり絶命（前書き）

残酷描写ありますので、苦手な方はご遠慮ください。

11、ゆかり絶命

11、ゆかり絶命

「あぁぁーーーーーーーーーっ」

ゆかりは絶叫し必死に腰を動かそうとしたが、固定された腰は身動き一つ出来ず、陰核を串刺しにした針はゆかりの身体の奥深くまでゆっくりと押し込まれていった。

「嫌ぁ、痛いぃーーーっ」

性器を串刺しにされ狂ったように泣き叫ぶゆかりの、陰核に根本まで突き刺された針が今度はゆっくりと抜かれていく。

「ひぃーーーーーっ」

自分の身体からずるずると抜かれていく針の感覚にゆかりは甲高い悲鳴を上げる。針が抜かれた陰核からは血が滲みだしていた。

「許して、もう許してぇーーっ」

想像を絶する苦痛にゆかりは思わず哀願していた。しかし、その哀願するゆかりの陰核に再び針が突き刺されていく。

「あぁぁぁぁぁーーーーーーーーっ」

ゆかりは自分の身体が針で串刺しにされる間、悲鳴を上げ続けた。

・・私、壊されちゃう・・

ゆかりは確実に自分の性器がそして身体が壊されていくのを感じていた。

針で陰核を串刺しにし、抜いてはまた串刺しにするという拷問を何度も繰り返され、ゆかりは発狂したように泣き叫んでいた。

「もう嫌ですぅ助けてくださいぃーーっ」

しかしゆかりの必死の哀願すら楽しむように、針は陰核に突き刺されていく。

「あぁぁあぁーーっ」

夥しい涙と鼻水を垂らしながらゆかりは腰を動かそうと必死に身体を捻ったがしっかりと固定された腰は身動き一つ出来なかった。そして、陰核から下腹部を何度も串刺しにされたゆかりはとうとう口から血を吐き出した。

・・苦しい、苦しいよぅ・・

ゆかりは破壊されていく性器の激痛に泣き叫び続けた。しかし、針は泣き叫ぶゆかりの姿を楽しむように性器に容赦なく刺され、そして抜かれてはまた刺されていく。

「他のところ刺してくださいっ。もうクリトリスは許してぇーっ」

虚しい哀願を繰り返すゆかりの陰核は何度も串刺しにされ血塗れに

なりながらも固く勃起している。しかし、ゆかり自身は恐怖と苦痛で意識を失いつつあった。そして、陰核を串刺しにされてもゆかりの反応が鈍くなり始めた頃、ゆかりに苦痛を最後まで味わあせるため右の乳首へ点滴針が刺され薬剤が注入され始めた。

「痛いぃーーーっ」

点滴で覚醒し失神することも許されず陰核に針を刺され続けるゆかりは、果てしなく自分の性器に与えられる苦痛に半狂乱になり口から血を吐き出しながら泣き叫んだ。その穴だらけされたゆかりの陰核がようやく凶悪な針の苦痛から解放され、今度は万力で挟みこまれると徐々に締め付けられていった。

「ひぃーーーーっ」

今度は自分の陰核が万力で潰される恐怖と苦痛にゆかりは悲鳴を上げる。しかし万力は容赦なくゆかりの陰核を締め付けていった。

「嫌っ嫌っ嫌っ嫌っ嫌ぁーーーっ」

ゆっくりと確実に潰されていく陰核の感覚にゆかりは涙を溢れさせ絶叫する。そのゆかりの悲痛な叫びを楽しむため万力が締められる速度がゆっくりとなった。

・・私のクリトリス潰されちゃう・・

ゆかりは自分の勃起した陰核が無惨に潰される様を想像し泣き叫びながらも極度に興奮していた。そして、自分の陰核が耐え難い激痛に襲われた瞬間。

「あぁーーーーーーーーーっ」

ぶっという小さな音と共にゆかりの股間から血が飛び散り、ゆかりは凄まじい悲鳴を上げていた。

「あぁぁぁーーーーーーーーっ」

陰核を潰され無様に口から泡を出し悲鳴を上げ続けるゆかりの股間で万力が捻られる。

「ひぃぃぃーーーーっ」

潰されたゆかりの陰核はあっけなくねじ切られ、ゆかりの股間から血が滴り落ちる。そして、ゆかりの目の前で万力が弛められていく。

・・私のクリトリス・・

ゆかりは涙で滲む目で無惨に潰れねじ切られた自分の陰核を眺めた。その陰核がなんとゆかりの口に入れられる。

・・私、自分のクリトリス食べてる・・

ゆかりは陰核を噛みしめながら自分が少しづつ発狂していくのを感じた。そのゆかりの眼前に凶悪な光を放つ鋸が示され、目を見開くゆかりの股間に鋸の刃が当てられた。

「い、嫌ぁぁぁーーーーーっ」

ゆかりは自分の性器が鋸で引かれる事を悟り泣き叫び必死に逃れようとした。

「やめてくださいっ、許してくださいっ」

逃れようとしても動かせない腰にゆかりは泣きながら哀願する。しかし、ゆかりがどんなに懇願しようとも許される筈がなかった。そのゆかりの無様な姿を楽しみながら鋸はゆっくりとゆかりの股間の中心を引いていく。ゆかりの最後のときがきた。

「ひぃぃぃーーーーーーーっ」

柔らかなゆかりの性器の肉が鋸の一引きで引き裂かれ血が溢れ出す。ゆかりの割れ目が本当に割れていく。

「助けてぇもうーっ」

ぶざまに泣き叫びながら性器を鋸で引かれていくゆかりの性器と共に肛門の括約筋も鋸で切り裂かれ、ぼとぼとと大便が零れ落ちる。

「ごめんなさい、ゆかりが馬鹿でした。もう許して下さい、お願いします。」

ゆかりが泣きながら必死に訴えるが、当然聞き入れられる筈がなく、鋸はゆかりの股間を引き続ける。その激痛にゆかりが口をきけたのはここ迄となる。生きたまま性器を鋸で引かれているのである。しかも、回転ノコギリ等で一気に切り裂かれるのではなく、手動でゆっくり性器を切り裂かれていくのである。ゆかりの苦しみは例えようがない程の凄まじいものだった。

「あぁびゃゃーーーーっ!!!!」

顔を上げ絶叫するゆかりの口に、ゆかりが漏らした大便が喉の奥まで一杯に詰め込まれ、更に鼻の穴にも詰め込まれていく。そして、涙を流す目にも大便が入れられゆかりの顔全体が大便で塗り固められていき、その大便が落ちないようにゆかりの頭にラップがぐるぐると巻かれていった。

「ふぐぅふぐぅ」

呼吸が出来ないゆかりは苦しさで頭をぶんぶん動かすが、ラップで何重にも巻かれているためそれは無駄な抵抗だった。ゆかりの股間を引いていた鋸は、ゆかりの恥骨を切り終わり臍の下まで到達し夥しい血が溢れ出ていた。もう、ゆかりの膣も子宮も膀胱も切断され破壊されていた。そのうちにゆかりの体もビクンビクンと痙攣しだし、頭も動かなくなっていった。ゆかりは哀れにも性器を切断されながら、大便を喉に詰められ絶命していた。

ゆかりが、出血死なのか窒息死なのか判別できないが、ゆかりが苦しみ抜いて絶命したのは間違いなかった。

ゆかりは、そのままガラスケースで囲われ展示された。ケースには階段が設置され、ケースの上部からゆかりに向かって放尿出来る様に工夫されており、訪れた客達がゆかりに小便を浴びせて楽しんでいた。その後ケースが外され、今度はゆかりの体に長さ1メートルのニードルを突き刺せるサービスが開始され、好評でゆかりの体は忽ち針ネズミになっていく。特に人気なのは、やはり性器周辺と胸、それに顔だった。ゆかりの顔面は両目に３０本以上、鼻や口にも８０本以上のニードルか突き刺され、胸には１００本以上、そして、切断された性器と太もも等には３００本以上のニードルが突き刺され、ゆかりは絶命してからもその体を破壊され続け、その行為はゆかりがただの肉片になるまで続けられた。

11、ゆかり絶命（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございます。
感想等頂ければ幸いです。また、他の作品でお会い出来ればと思います。

よろしくお願いします。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n7783ik/

電脳空間（変態少女ゆかりが性器処刑されるまで）

2025年2月11日01時58分発行